



《唐三彩駱駝》中國唐時代 天津市藝術博物館藏

天津市
藝術博
物館展

日中友好の架け橋

千葉市美術館はどのような美術館であるべきか、そのことがいつも私の頭から離れません。現在のところは、三つの軸をからみ合わせて、年間の、あるいは数年の幅を見ながら、展示活動を続けています。

一つの軸は、空間の広がり軸です。市の全面的なバックアップの下にある美術館なのですから、千葉市やこの房総の地をしっかりと踏まえていなければいけません。しかしそれだけに小さくちぢこまっていたら、もっと危ういことでしょう。井の中の蛙のように、狭い視野で自足してしまうようでは困ります。日本はもとよりのこと、近隣のアジア諸国、さらには遠い欧米やその他の地域の美術にも関心を広げていかなければなりません。

二つ目の軸は、時間の軸です。私たちがいま現在生きているまさにこの時代の、生成し、発展しつつある現代美術から目をそむけてはならないでしょう。そしてもとより、歴史上の時間を近く、遠くさかのぼり、先人たちの美のいとなみを多様な方向に確かめ、味わう必要があります。

そして最後の三つ目の軸が、老若男女各層の観覧者を意識した軸です。ごく一部の世代や性別など、嗜好や美の質に極端な偏りを生むことがないように、よく点検し、注意をはらうことが必要かと思えます。

近代の市民社会が美を共有できる場として確保した美術館、とりわけ公立の美術館には、多少の個性は備えながらもやはり多くの市民に喜んでいただける場であり続けるべきように思われます。あれもこれもと欲張って、虻蜂(あぶはち)取らずになる恐れもありますが、館長や学芸員の独りよがりや押し通してはならないと、できるだけ広く目配りをしながら数年単位の展示計画を立てているつもりです。どうぞ市民の皆様におかれま



《翡翠キリギリス白菜》中国 清時代 天津市芸術博物館蔵

しても、美術館を共に育てるお気持ちで、ご希望やご意見をお寄せいただければ幸いです。

さて、この秋は、先ほどあげた三つの軸にからめていいますと、空間的にはアジアの内でも歴史的にもっとも親密な交流があった中国の、時間的には新石器時代から現代に到る全時代の、また各種各層のどなたにも喜んでいただける内容豊かな「天津市芸術博物館展」が、開催される運びとなりました。

千葉市は、世界中に七つの姉妹・友好都市をもっています。その中で最も近い地理関係にある天津市は、人口千万人を越す大都市で、北京、上海、重慶とともに中国の四大直轄市として重きをなしています。私は、身近な友好都市の天津市と文化交流の実をあげたいものと熱望して、平成12年とその翌年の二度にわたり直接同市の芸術博物館を訪問させていただきました。千葉市

と天津市の美術館・博物館同士で、日中両国の美術展を交換しようという私どもの唐突な提案を、前館長の崔錦先生、そして現館長の陳卓先生は寛大にも受け入れてくださり、市当局の皆様の温かいご理解とご支援にも恵まれて、今回の素晴らしい中国美術展が実現することになったわけです。

天津市芸術博物館は、収蔵品5万件を誇る中国でも有数の美術館・博物館です。その同館が、選りすぐりの名品を100点も、絵画、工芸、文房具や民芸品など幅広い分野にわたって送り届けてくれるのです。この展覧会が千葉市と天津市、ひいては日本と中国の、輝かしい友情の架け橋となってくれることを信じています。一人でも多くの皆様にご高覧いただければ幸いです。

館長 小林 忠

天津と千葉、ラストエンペラーとその弟

天津といえば・・・

中国天津といえば日本では「天津甘栗」「天津井」のイメージがあります。「天津甘栗」は周辺の河北省が栗の産地で、天津の港から日本に出荷したためそう呼ばれるようになりました。天津の町でもあちこちで甘栗を売っていますが、聞くところによると、日本で有名になったことから逆輸入(栗そのものは河北省産)して売っているのだとか。お土産として何種類か売られている「天津甘栗チョコレート」も、日本で「天津甘栗」が有名のため開発された商品なのでしょう。生産地も遠く離れた中国の南方です。栗好きの筆者が試したところ天津で売っている甘栗も、空港で売っている天津甘栗チョコレート(チョコレートとは中国語でのチョコレートの表記)も美味しかったです。「天津甘栗クッキー」はまだ試し



図1 千葉市ゆかりの家・いなげ(愛新覺羅溥儀飯寓) 撮影のため警報装置などを隠しています。

ていません。天津の港から輸出したことによってそう呼ばれる「天津甘栗」は、中国元時代から首都北京の外港として栄えた天津の都市の性格を表わしているといえます。

白いご飯の上にかに玉、そしてとろりと餡をかけた「天津丼(または天津飯、一説には関東が天津丼、関西が天津飯だとか)」は、昭和初期に日本で名づけられた名称で、直接天津との関係はありません。昭和初期は日本がさかんに中国大陸に進出していた時期で、大陸の玄関口の一つであった天津の名前になじみがあったためそのようなネーミングになったのでしょう。

ちなみに千葉にも天津(あまつ)という地名があります。ここは伊勢神宮へのお供えを調達する御厨(みくりや)があり、阿摩津御厨という名があったことから、天津(あまつ)になったそうです。

天津と千葉、ラストエンペラーとその弟

千葉市と天津市が昭和61年以来友好都市であることから、このたび千葉市美術館では天津市芸術博物館展を開催することになったわけですが、天津と千葉には友好都市という太いパイプ以外にも興味深いつながりがあります。

清朝最後の皇帝、宣統帝溥儀(愛新覺羅溥儀、1906～1967)は西太后の指名によって1908年わずか3歳で即位し、1912年に退位した後も協定により紫禁城(今の故宮)に住みつづけていたのですが、1924年国民軍が北京を占拠し、紫禁城を追放された溥儀は天津の日本租界(租界とは中国で、アヘン戦争以後、開港都市に設けられた外国の租借地区。外国人がその居留地区の警察・行政を管理した。)に逃れて7年間暮らしました。天津での溥儀の生活は割合におだやかであったように見受けられます。

溥儀には1歳年下の弟愛新覺羅溥傑(1907～1994)がいました。1929年溥傑は日本に留学して、陸軍士官学校に学びました。1937年、嵯峨侯爵家令嬢浩(1914～1987)と結婚した溥傑は帰国するまでの新婚生活を千葉市稲毛で過ごしました。政略の意味が濃い縁組でしたが、夫妻は仲むつまじく、千葉稲毛での溥傑の生活もそれなりにおだやかなものであったでしょう。

つまり天津は兄溥儀にとって、千葉稲毛は弟溥傑にとって仮住まいながらも穏やかな暮らしの記憶と結びつく土地だったと



図2「流転の王妃・最後の皇弟」から。
浩(常盤貴子)も満州族の正装をしています。溥傑(竹野内豊)と共に溥儀に挨拶をするところ。

いえるのではないのでしょうか。

稲毛の溥傑・浩夫妻が住んだ家は現存しており、千葉市ゆかりの家・いなげ(愛新覺羅溥傑仮寓)として、一般公開されています(12月28日まで外壁改修工事のため閉鎖中)。今年の夏のある日、ゆかりの家・いなげで、ドラマの撮影が行われました(図1)。テレビ朝日開局45周年記念ドラマスペシャル「流転の王妃・最後の皇弟」(図2)の撮影で、溥傑役の竹野内豊さんが中国人留学生を見送る場面が収録されました。実際に溥傑が住んでいた家に足を踏み入れて、竹野内さんも感慨深そうでした。

このドラマは激動の時代を、ラストエンペラーの弟溥傑とその妻である日本人女性浩の眼を通して描くスケールの大きな作品で、溥傑・浩夫妻の愛と勇気の物語でもあります。ゆかりの家でのロケは限られた場面でしたが、スタジオにゆかりの家そっくりのセットを組んでの収録もあったそうで、放送が楽しみに待たれます。

溥傑さんは書をよくし湖社画会にも参加しましたし、浩さんは結婚前画家を目指して油絵を描き展覧会にも入選していました。美術にも縁が深い二人の住んだ千葉市ゆかりの家・いなげは千葉市民ギャラリー・いなげの一施設の扱いになっており、現在千葉市美術館で管理運営しています。

やや脱線しますが、ベルトルッチ監督の「ラストエンペラー」以外にも溥儀が登場する映画・ドラマはいくつもあります。中国では西太后から溥儀に至る時代が日本の映画・ドラマで言えば幕末明治ものに近い扱いのようです。そのうちのひとつ、中国で制作されたドラマシリーズ「末代皇帝」(溥傑監修)では中年以降の溥儀を名優朱旭(日本ではドラマ「大地の子」の陸一心の養父役で有名)が演じていますが、朱旭さんも千葉市ゆかりの家・いなげを訪れたことがあります。

テレビ朝日開局45周年記念ドラマスペシャル
「流転の王妃・最後の皇弟」 2003年(秋)放送
【原作】 『流転の王妃の昭和史』 愛新覺羅浩著 主婦と生活社刊
『溥傑自伝』 愛新覺羅溥傑著 河出書房新社刊
【脚本】 龍居由佳里
【監督】 藤田明二
【制作】 テレビ朝日
【配役】 愛新覺羅浩 常盤貴子
愛新覺羅溥傑 竹野内豊 他

天津市芸術博物館展のみどころとラストエンペラー

天津市芸術博物館は1957年に開館した、中国でも有数の歴史を誇る博物館です。現在の建物は旧フランス租界の美しい街並みにある近代西洋建築ですが、新館を建設し、天津市歴史博物館と統合した新しい天津博物館にまもなく生まれ変わる予定です。そのコレクションは中国全土の歴代芸術作品と天津地方の民間芸術品からなり、所蔵品の範囲は中国古来の陶器、磁器、玉器、銅器、書、絵画、敦煌文書、文房具といった文物から、楊柳青で制作された年画、泥人形、凧、紙細工といった天津周辺地域の民間芸術品までを網羅しています。5万件余りの作品を所蔵しており、質量ともに中国で最も優れた博物館の一つといえましょう。コレクションの特質は天津の都市の性格と関連が深いものです。天津では蓄積した富を背景に文物収集が盛んになり、清代中期の安岐など多くの鑑識眼を持ったコレクター

を輩出したため、多くの伝世品が天津に集ることとなり、それらの伝世品が後に天津市芸術博物館のコレクションとなりました。

今回の展覧会は書画の優品を中心に、陶磁器、玉器、工芸品、民間芸術の作品全100点を展示するものですが、特に絵画に重点を置いています。1万件近い絵画のコレクションから選りすぐった46点の作品は明清の中国絵画史を概観できる内容です。その中には安岐の所蔵を経て乾隆帝の宮廷に入った仇英「桃源仙境図」(図3)、肖像画の名手である曾鯨が明末清初の画家王時敏を描いた「王時敏像」(図4)、上下巻合わせて全長80メートルの中国絵画最長の画卷



図3 仇英「桃源仙境図」 天津市芸術博物館蔵



図4 曾鯨「王時敏像」 天津市芸術博物館蔵



図5 沈銓「柏鹿図」 天津市芸術博物館蔵

黄鼎「長江万里図巻」、来日して江戸時代絵画に大きな影響を与えた沈銓(南蘋)「柏鹿図」(図5)など興味深い作品が含まれています。

ラストエンペラー溥儀は清朝崩壊後紫禁城に住んでいたころ、城外に住む溥傑に見せるという名目で宮廷の文物を持ち出し、当時夢見ていたイギリス留学の資金づくりのために売り払ったりしていました。宮廷からの文物流出はそれ以前からも行われており、どの時点で持ち出したものかを突き止めることは困難ですが、今回千葉で展示する天津市芸術博物館の所蔵品にも溥儀にゆかりのあるものが含まれています。項聖謨「且聽寒響図」(部分、図6)は溥儀が宮廷から持ち出したものが天津にたどりついたものです。無款「万笏朝天図巻」にも溥儀が見たことを示す「宣統御覽之宝」印が捺されています。「『祺皇貴太妃之宝』印」の祺妃は咸豊帝(彼の側室のひとりが西太后)の嬪妃(貴妃よりも身分の低い側室)でしたが、溥儀が敬って「皇祖祺皇貴太妃」としたものです。

日本での天津市芸術博物館所蔵品の紹介は過去にも行なわれていますが、全貌を紹介する展覧会としては日本初の機会となります。中国歴代芸術の豊潤な世界をどうぞお楽しみください。

学芸員 伊藤紫織

図6 項聖謨「且聽寒響図」(部分) 天津市芸術博物館蔵
皇帝は「私が見た」とでかがかとハンコを捺していいことになっています。



天津市芸術博物館展

2003(平成15)年10月11日(土)～11月24日(月・振替休日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日、但し10月13日開館(月・祝)、翌14日(火)休館

11月3日開館(月・祝)、翌4日(火)休館

11月24日(月・振替休日)開館

10月18・19日は千葉市民の日 無料開放

【入館料】 一般 1000(800)円

大学・高校生 700(560)円

中・小学生 300(240)円

()内は団体30人以上の料金

【主催】 千葉市美術館

【後援】 中華人民共和国駐日本国大使館

【講演会】

「天津市芸術博物館の絵画」

10月18日(土)午後2時より(開場午後1時30分)

講師 小川裕充(東京大学教授)

千葉市美術館11階講堂 入場無料 先着150人

【琵琶演奏会】

「琵琶のコスモロジー」

10月25日(土)午後2時より(開場午後1時30分)

出演者 中川鶴女・御室美佐子・横山聡子

千葉市美術館1階さや堂ホール

「天津市芸術博物館展」入場券を提示 先着130人

ボランティア日和 episode 1

美術館ボランティアの活動が、ギャラリートークを中心に開始されました。そこで「C'n」でもボランティアさん達の感想や意見を順次ご紹介させていただきたいと思います。

「ギャラリートーク初体験」

- ホノルル美術館所蔵 浮世絵風景画名品展 -

美術館ボランティアの研修に入って早8ヶ月、4月はギャラリートークにチャレンジしました。ギャラリートークはもちろん初体験ですが、浮世絵の世界も私にとっては初体験に近く不安でいっぱいでした。来館者と絵を囲み、作品のお話を少しさせて頂きながらその時間、空間を楽しく共有して作品の鑑賞ができたらいいなと思いました。

まず何よりも作品と向き合ってよく見、図録や画集・研修を通して知識を深め、また作品にもどってじっくり鑑賞し、自分なりの作品感を持つことが大切と思いました。始めてみて自分が作品に入り込めないと研修のお話も図録の解説もなかなか頭に入らないことがよく分かりました。北斎や広重が少しは身近に感じられるようになり、幾つかの作品について解説文を書いてみました。今回はその段階でギャラリートークに臨んでしまいました。

4月24日(木)11時30分、小学生の賑わいの余韻もあり、対象となるお客様も一人(途中数人の出入りはありましたが)でしたのであまり緊張せずに始めることが出来ました。30分ほどの拙いトークにお付き合い頂き、広重の「東海道五十三次之内 蒲原」のあたりでは少し対話をする事も出来、感謝の念でいっぱいでした。学芸員の浅野さん、ボランティアの八代さんにも応援して頂きましたことは大変心強く嬉しいことでした。

仲間のファイトいっぱいチャレンジする姿に背中を押される思いでギャラリートークの入り口に立つことが出来ましたが、今回はお話す事で自分の鑑賞を確認させて頂いた感じでボランティアとはおこがましい限りです。時間の割り振り、声に出しての練習、言葉遣い、ご案内のしかた、内容面では話すことの何倍もの豊かな備え、など課題

はたくさんあります。仲間の頑張る姿に刺激され、助けられ、学ばせて頂きながらまたチャレンジしてみたいと思います。

美術館の帰り道、「あ、今日の雲は*あてなしぼかしの雲」と空に目をやる自分に驚きながら浮世絵の世界をのぞかせて頂き、楽しみが増えて良かったなと思いました。

美術館ボランティア 青木恵子

*あてなしぼかし=浮世絵用語。版画のぼかし技法の一つで、自然な絵具のにじみを利用する。決められた形がないので「あてなし」。雲の表現などによく用いられる。



「大原美術館所蔵名品展」でのボランティアのギャラリートークの様子。この日のボランティアは坂本さん。最近ではこのギャラリートークを目当てにいらっしゃるお客様も増えてきました。(開催日時につきましてはお問い合わせ下さい。)

千葉美術散歩 - 人・もの・自然 -



喜多川歌麿 『潮干のつと』
寛政元年(1789)刊

「時をめぐる / 時はめぐる」「夢二・深水と大正の女たち」
「2003年アートの旅」に続く、今年度のコレクション展4本目となるのが、「千葉美術散歩」です。同時期に開催の「天津市芸術博物館展」にあわせて企画しました。千葉市と友好都市である、中国天津市の芸術博物館より、同館の誇る中国全土の歴代芸術品と、天津地方の民間芸術の粋がやってきます。そこで、千葉と千葉市美術館を紹介するような所蔵品展示を行ってこれをお迎えしようというものです。

展示内容は、主に次の2つの観点から構成しています。

まずは、千葉の自然の象徴、海をめぐるイメージです。千葉市の位置する房総半島は三方を海に囲まれ、古より海との関わりが深い土地です。都市化の進んだ千葉市の海岸線はといえば人工的に造られた部分が多いのですが、今なお人々の千葉のイメージの中には海が深く関わっています。天津市もまた北京の外港として栄え、両市はいわば“海つながり”。そこで、必ずしも現実の千葉の海の姿という内容だけにとどまらない、海をめぐるイメージをコレクションに探ってみました。潮干狩りに賑わったかつての千葉市の海からの連想で、海辺の小さな生き物、貝をめぐる詩的な美術というテーマも掲げています。



跡見泰 《蛸壺》 1951年

次に、現実の千葉の地と人のつながりの跡を、美術作品という「もの」を通じて紹介します。“旧川崎銀行千葉支店の建物(当館1階にホールとして保存活用している昭和2年竣工の建物)が息づいていた頃”というイメージです。現在ではなかなか実感しづらい状況にありますが、千葉市美術館があるところは市内でも古い繁華街です。美術館の最寄りのバス停のある「大和橋」はその昔は高札場もあったほど、面する国道は「本町通」と呼ばれた目抜き通りでした。戦禍をくぐり抜けた稀少なこの



千葉市中央区中央にあった
国松画廊 (1994年撮影)

洋風建築は、そんな中心街に建っていたものです。そしてその数軒隣にあった千葉で最初の画廊と目される国松画廊、さらに、大正・昭和にかけ



河口龍夫 《関係 - 蓮の時・葉緑素》 1992年
神谷伝兵衛別荘(市民ギャラリー・いなか)における展示

て少なくない数の美術家志望が巣立っていった旧制千葉中学校という、美術の拠点となった二つの場所をとりあげます。

千葉は、かつて古代蓮の種が発掘され、現代に生命を復活させたところから、オオガハスを「市の花」といただく町です。奇しくも美術館が位置するのは、かつて蓮池(はずいけ)とよばれた一大花柳街で蓮の漂う池を埋め立てたといういわれあるところ。展示室最後のスペースは、その「蓮池」「古代蓮」に着想を得た展示となります。今現在はまだ机上のプランにすぎませんが、本誌発行の頃にはどんな様子に仕上がっているでしょうか。

千葉市美術館を紹介する意味も込めて、コレクションの三本柱である、「1. 房総ゆかりの美術」「2. 江戸時代の絵画・版画と近代版画」「3. 現代美術」の各分野から、パラエティーに富んだ作品が出品されます。散歩のような気分で、イメージの連鎖をお楽しみいただければ幸いです。

浜口陽三 《やどかり》(部分) 1961年

千葉美術散歩 - 人・もの・自然 -

2003(平成15)年9月20日(土)-11月24日(月・振替休日)
10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

10月13日(月・祝)開館、翌14日(火)休館
11月3日(月・祝)開館、翌4日(火)休館
11月24日(月・振替休日)開館

【入館料】 一般 200(160)円
大学・高校生 150(120)円
中・小学生 100 (80)円
()内は団体30人以上の料金

「天津市芸術博物館展」入場の方は無料でご覧いただけます。
10月18・19日は千葉市民の日 無料開放



ダン・グレアムによるダン・グレアム



ダン・グレアム
キューブに囲われたハーフミラーの円柱とビデオサロン
ディア財団 1991



ダン・グレアム
円形の入口のある三角柱
千葉市美術館 1989



ダン・グレアム
向き合った鏡と時差をもつビデオ・モニター
バンクーバー・アート・ギャラリー 1975

1965年にアーティストとして活動を開始して以来、アメリカの現代作家ダン・グレアムは、常に時代の最先端を走り続けてきました。そして、絵画や彫刻といった既成のジャンルに収まりきれない、全く新しいタイプの作品を数多く生み出してきました。彼の作品は、その先進性のために、80年代まではそれほど注目されませんでした。90年代になって、欧米を中心に高い評価を確立しました。

グレアムは、60年代中頃、コンセプチュアル・アートの先駆けとなるような作品を、雑誌等の印刷メディアに発表しました。これらは、言葉や図表を使って、雑誌というメディアの機能や特徴を浮かび上がらせようと試みた、非常に難解な作品です。続く70年代には、当時は最先端技術であったビデオ装置を、ハーフ・ミラーや鏡と組み合わせることで、独特の視覚体験をもたらすインスタレーションを生み出しました。

このハーフ・ミラーと鏡を用いたインスタレーションは、彼の建築への強い関心と一体化し、80年代初頭、パヴィリオン/彫刻へと発展しました。これは、外部から鑑賞できる(ミニマル・アート風の)彫刻として機能するだけでなく、内部に入ることができる建物(ガラスの家)としても二重に機能する、彼独自の芸術形式です。パヴィリオンは、光の状態次第で透明にも鏡面状にもなるハーフ・ミラー(マジック・ミラー)の働きによって、実に多彩で豊かな表情を見せてくれます。

「ダン・グレアムによるダン・グレアム」展は、そのタイトルが示すとおり、作家自身の意向が強く反映された展覧会です。最初期の作品から新作に至る、このアメリカ人作家40年の歩みが一望できるだけでなく、本展覧会のために新たに制作された2つの大型パヴィリオンも展示されます。



ダン・グレアム
郊外住宅の改変
ダレド・コレクション 1978



ダン・グレアム
二重露光
マリアン・グッドマン・ギャラリー 1996

ダン・グレアムによるダン・グレアム

2003(平成15)年12月2日(火)-2004(平成16)年2月1日(日)

10:00-18:00 金曜日は20:00まで

(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 12月29日(月)-1月3日(土)

1月12日(月・祝)開館、翌13日(火)休館

【入館料】 一般 1000(800)円

大学・高校生 700(560)円

中・小学生 300(240)円

()内は団体30人以上および前売の料金

前売券は11月1日より当館ミュージアムショップ(11月24日まで)、JR東日本みどりの窓口・びゅうプラザ(12月1日まで)で販売。

展示室で考える

展覧会のための施工

ある美術館で、前に来たときとまるっきり雰囲気が変わっていて「こんな部屋だったかな？」と不思議に思ったことがないでしょうか。それは、開催される展覧会にあわせて仮設工事が行われたからです。私たちはその仮設に独特の意味を込めて「施工」とか「造作」と呼んでいます。

美術品の出所を考えれば、茶掛であった軸物は茶室、屏風は書院、古い油絵ならば洋館の応接の壁面といったように本来存在すべき場所があり、それが諸般の都合で美術館にきているものです。現代の美術だって、どんな場にも存在しうるものはまずありません。むしろ想定された場があり、その場が用意されなければ、作品と対峙する鑑賞という行為が、成り立ち難いことが多いものです。総ての作品は、相応しい場が与えられてこそ、鑑賞者とのあるべき出会いが成立する。しかし特定の分野の作品のみを展示するために設計された幸運な美術館を除いて、多機能に設計された普通の展示室では、そうも言ってもらえません。

そのために、出し物毎に「施工」が必要になってくるわけですが、もし「施工」不要論を唱えるならば、相継ぐ「企画展」によって操業する日本型美術館という制度の在り方にまで遡及すべき問題でしょう。

具体的にどんなことをするのかというと、主には仮設壁を立て、壁の色を塗り替えたり、特定の作品のために展示ケースを製作したりといったことです。特別な照明をあつらえることもある。展示室の中に、更に小振りな展示室を造り込むこともあります。それまでたしかに存在した出口が綺麗な壁になり、壁には窓が開きます。美術館の展示壁とは、常に釘が打たれたり、塗り替えられたりする素材と考えられます。

作品が素晴らしければ施工など不要だろう、という考え方も出来ます。確かにバブルの時期にデパート展で行われていたような過剰な施工(というより最早装飾)には疑問を抱かざるを得ないものが多くありました。しかし本来「施工」は、芸術作品の発するアウラとの調和をとるために建築空間を再解釈する空間設計なのです。演劇の完成度にとって舞台美術が重大な役割を果たすように、美術館の展示という行いにとっては決して付随的ではない重要な仕事です。

作品が良ければいいだろ、みせりゃいいだろうというのではなく、その出会いの空間づくりである施工への留意は、来館者との接点に関する態度表明でもあるでしょう。

それにしても、企画が煮詰まり、施工の仕様を考える度に思うことがあります。これは、空間に何かを付け加える作業ではなく、取り去る一方。マイナスの仕事ではないかと。

半田滋男（和光大学芸術学科助教授、元千葉市美術館学芸員）

「美術館ニュース」編集後記

「芸術の秋」となりました。外を歩くには一年の中でも一番気持ちのよい季節なのではないでしょうか。普段外に出るのが億劫な方も、散歩がてら美術館にいらしてみても如何でしょうか。幸か不幸か、千葉市美術館は駅から少し離れた位置にあります。運動不足の解消のためにも(?) '千葉美術散歩'を楽しんでみてください。

次回の美術館ニュースは来年正月の予定です。「ダン・グレームによるダン・グレーム」展の展示風景を盛り込んだ特集をお送りします。

お詫び

「C'n」27号の4ページ「千葉美術散歩」の展覧会会期に間違いがありました。9月21日(土)とありますが、正しくは20日(土)となります。深くお詫び申し上げます、訂正させていただきます。

千葉市美術館

お問合せ：043-221-2311 ホームページ：<http://www.city.chiba.jp/art>

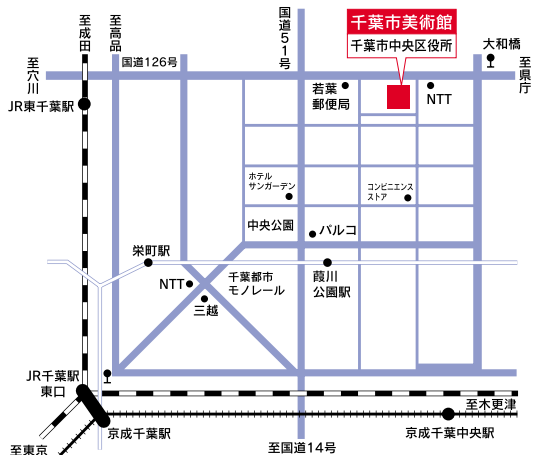
JR千葉駅東口より

徒歩約15分

千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩5分

バスのりば⑦より京成バス「大和橋」下車徒歩2分

京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



【編集・発行】 千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】 2003年10月10日

【印刷】 株式会社プリンテックメディア